下村観山「美人と舎利」を読み解く
―河骨と芭蕉葉文様を手がかりに―

藤井享子

1. はじめに

一昨年秋に、豊田美術館の成瀬美幸学芸員から一通のメールをいただいた。当館所蔵の「**美人と舎利**」（図１）の、美人の纏う衣服から何か読み取れないかという問い合わせである。展示中のこの作品を作品ガイドボランティアが説明するのに作者の説明等がないのでお困りとのこと。髪型、化粧、それに衣服の文様から解ることをとりあえず返信したものの、特に打掛の文様は気にかかり、詳しく調べたいと思っていた。そこへ昨年、紀要への投稿を勧められ、論考として纏める機会をいただいた。小袖文様の意味を研究する立場から、美術史ではとかく見過ごされがちな服飾文様に焦点を当て、そこから作者の意図を汲み取り、この美人の人物像に迫ることができたらそれ以上に嬉しいことはない。そのことで少しでもこの絵の理解に役立てれば幸いと思い、執筆する次第である。

明治42（1909）年に下村観山が描くこの美人は、髪型や着付けなどから江戸中期頃の装いをしている。そこで資料に近世の小袖文様の雛形本、俳諧や文学、芸能などを参照し、打掛の河骨文様と帯の芭蕉葉文様について探ってみた。その結果、これらの文様から、この美人は『源氏物語』や能の『葵上』に登場する六条御息所である可能性が高いことが分かった。以下に、このような考えに至る経緯を、これらの文様の意味を考察しつつ辿ってみる。

図2
美人と舎利、部分

2. 美人の装い

まず「美人と舎利」の右幅の美人の全身の装い（図２）から見てみよう。左幅の舎利（骸骨）と向き合い左向きの立姿で描かれるこの美人の髪型は、江戸中期に見られる、髱を長くした髪型で、髷を結わず捌き髪を長く垂らしている。眉は落とし、鉄漿を付けているので既婚女性であることがわかる。衣服は薄紅色の総匹田の小袖に打掛を重ねている。打掛は芥子色に大ぶりの格子の地に、葵のような心臓形の葉を放射状に車座に繋いだ大きな丸文様を配している。胸には五七の桐の紋が付いている。帯の文様は芭蕉葉である。（図3）

図3
美人と舎利、部分拡大

胸の桐紋は、鳳凰の止まる木とされることから天帝の象徴とされ、皇室や足利氏など時の政権担当者に使われた家紋である。中でも花の数が多く特に格の高い桐紋が五七の桐紋で、この美人が皇室や豊臣家など高貴な身分の女性であることを示している。

3. 葵か河骨（こうほね）か

美人の装いの中で一番目に付くのが葵のような葉を放射状に描く大きな丸文様である。葵は『角川古語大辞典』に「うまのすずくさ科に属し、山中の陰地に生ずる。茎は地上に横臥し、双葉相接して互生する。葉は心臓形で表面に長毛を列生する。葉間に一小花をつける。賀茂祭に、これの葉を社前、牛車の簾（すだれ）、供奉の者の衣冠などに飾る。また、紋章に

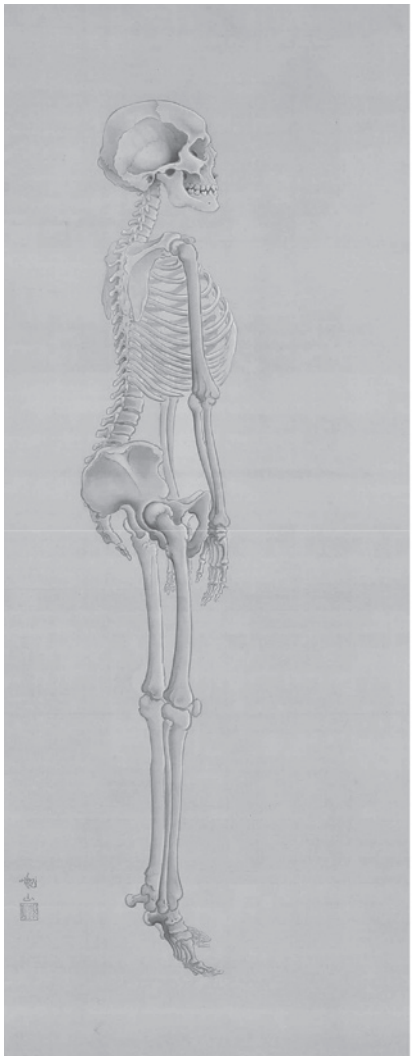

図1
美人と舎利

用い（賀茂朝臣系の家など）、特に三葉葵（みつばあふひ）は、徳川家の家紋として知られる。…」とある。現代、葵と言えばタチアオイを指すが、近世以前では葵はフタバアオイを指した。葵は、葵祭や『源氏物語』葵の巻も指すから、この打掛は格子柄を簾に見立て、葵を翳した葵祭の牛車を連想させた可能性も考えられる[1]。

図4
家紋　五つ裏葵

図5
家紋　中輪に五つ裏河骨

一方、葵によく似た家紋に河骨紋がある。『日本の家紋大事典』には河骨紋の説明に「葵紋の使用制限から生まれたもので、実際の河骨の形とは異なる[2]。」とある。確かに葵紋と河骨紋はとても良く似ている。これらの家紋に葉の葉脈を描かないものがあり、葵紋では五つの葵の葉の「五つ裏葵」（図4）、河骨紋には「中輪に五つ裏河骨」（図5）がある。美人の打掛の、葵のような葉の文様には葉脈がないので、裏葵もしくは裏河骨かもしれない。しかしこの打掛の文様は家紋ではない。そこで、江戸時代の雛形本から葵と河骨文様の例を探してみた。

図6
『新撰御ひいなかた』たちあふひのもやう

雛形本の最初の版本である寛文7（1667）年刊『新撰御ひいなかた[3]』には、200の文様の内、葵は2例見られる。1つ目は「ぢもゝいろ　たちあふひのもやう（地桃色　立ち葵の模様[筆者注、以下同じ]）」（図6）で、右肩から袖口にかけて丸く区切った中に本の文字1つを大きく置き、立ち葵（現代のタチアオイではなく葵の葉を立たせたもの）を4つ配置する。立ち葵は本多家の家紋であるから、本の文字で本多家を連想させた、本多家所縁の文様と思われる。2つ目は「ちうこん　みつあふひ（地鬱金　水葵）」（図7）で、肩と腰に水葵と花穂を描いている。

一方河骨は4例ある。1つは「ぢふぢいろ　こほねやなきぬいはく入（地藤色　河骨柳縫箔入）」（図8）で、右袖口から裾にかけて柳の枝状に河骨の葉と花穂を描く。もう1つは「地きゝやう　こほねなかしのもやう（地桔梗　河骨流しの模様）」（図9）で、これも右袖口から裾にかけて流れるように茎を描き河骨の葉と花穂を置いている。2例とも紫系の地色である。3つ目は「こうしつもやうぢ白　水にこほねおもたか（後室模様地白　水に河骨澤瀉）」（図10）で、白地に観世水と河骨と澤瀉を散らした水辺の文様となっている。4つ目は「ぢえどちゃ　こほねのまるながし（地江戸茶河骨の丸流し）」（図11）で、家紋の、中輪に五つ裏河骨4つを左袖から右裾にかけて流すように配置した文様である。

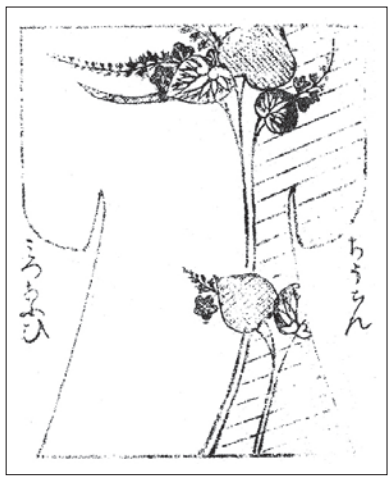

図7
同上　みつあふひ

雛形本には他に延宝5（1677）年の『新板小袖御ひいなかた』の「むすめのもやう」に「地きゝやうぬいそめ出しかのこ」と記された、家紋の五つ河骨を配したもの（図12）がある。同書には「おかたふうとめ袖もやう」のところに「地むらさきくゝしうわゑ」と説明書きのある、右裾から肩全体にかけて立ち上がる河骨と花穂を描く文様（図13）もある。これらには河骨とは明記されていないが、『新撰御ひいなかた』の河骨文様同様、紫系の地色であり、河骨の可能性が高い。ほかに貞享4（1687）年の『源氏ひながた』に2例、「中納言の局」の項に「地白　かうほねの丸もやう」（図14）、「江口の遊女」の項に「地うこん　つなぎこうほねの

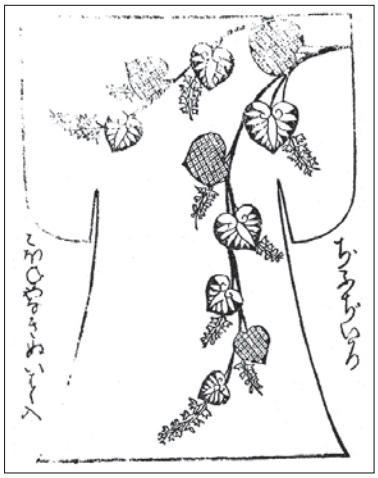

図8
同上　こほねやなきぬいはく入

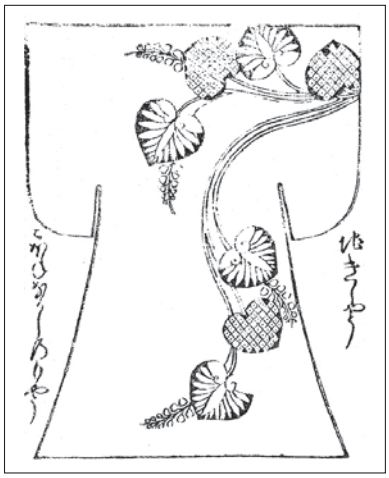

図9
同上　こほねなかしのもやう

図10
同上　水にこほねおもたか

図11
同上　こほねのまるながし

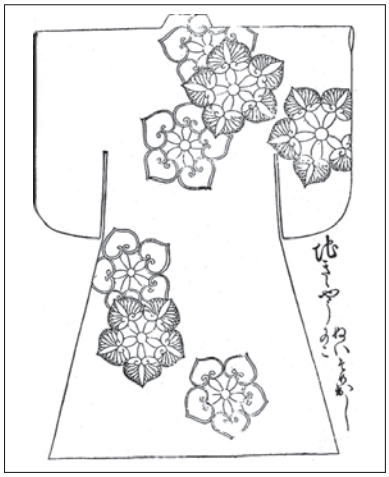

図12
『新板小袖御ひいなかた』地きゝやう

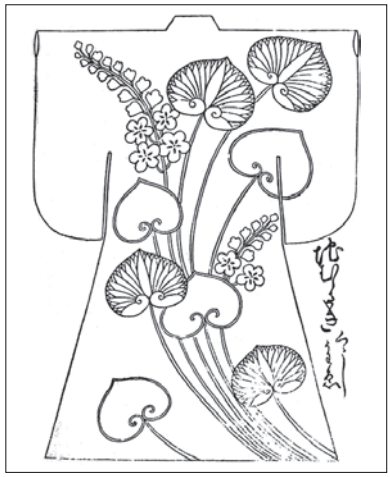

図13
同上　地むらさき

もやう」（図15）がある。これらはいずれも「かうほね」「こうほね」と明記されている。

このほか西川祐信の絵本にも河骨文様は数多く見られる。享保8（1723）年の『百人女郎品定』には采女、盲女、散茶女郎（図16）、局女郎、水茶屋、奉公人の女、の6人が河骨とみられる文様の小袖を着ている。そのうち盲女、散茶女郎、局女郎は三味線を持つ姿で、散茶女郎、水茶屋、奉公人の女の着る小袖は流水とともに描かれている。同じ作者の『正徳ひな形』（正徳3[1713]年）御所風の第五番には「水にかうほねのもやう」（図17）と、河骨の名があり、『百人女郎品定』と同様の文様であることから、『百人女郎品定』の文様は河骨の可能性が高い。河骨は江戸時代を通じて、御所でも娘でも、年配の女性にも遊女にも広く好まれた文様だったことが窺える。

図14
『源氏ひながた』かうほねの丸もやう

4. 河骨の意味

それでは、河骨にはどのような意味があるのだろうか。葵紋が徳川家の家紋であるから、徳川家に遠慮してよく似た河骨紋が生まれたとされている[4]が、それにしても、なぜ河骨が選ばれたのだろうか。

『日本国語大辞典』に河骨は、「河骨・川骨」と載り「スイレン科の多年草水草。各地の池沼や小川に生える。泥中に太い根茎がある。長柄があって水上に抜き出、葉身は長さ一〇〜三〇センチメートルの長卵形または長楕円形で茎部はやじり形。…夏、花茎を水上にのばし、頂に径約五センチメートルの黄色の花を上向き単生する。五枚の萼片は花弁状。花弁は多数あり、小形の長方形。…和名は白く太い根茎の形状による。…漢方では根茎を「川骨（センコツ）」と呼び、健胃・強壮・止血剤として産前産後などに用いる。」とある。葵が山中の谷間に生えるのに対し、河骨はスイレン科の水草で、葉も葵より長く、卵形の心臓型である。生える場所も形状も違うにもかかわらず、近世小袖には、葵と瓜二つの河骨文様が多く見られた。心臓型の葉をもつ植物は他にもあるのに、なぜ河骨が葵そっくりに描かれたのだろうか。そこで河骨の、より具体的なイメージを文献資料から辿ってみる。

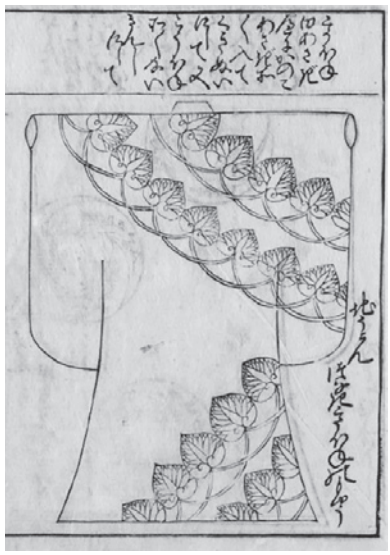

図15
同上　つなきこうほねのもやう

河骨は江戸時代の百科事典『和漢三才図会[5]』の「萍蓬草（こうほね）」の項に次のように見える。

> 萍蓬草（ひょうほう）は南方の池沢に生える。三月に茎は水から顔を出すが、太さは指ぐらい。葉は…径四、五寸、生え初めは荷（はす）の葉に似ている。六、七月に黄花を開く…実は角黍（ちまき）の状に似て、長さ二寸ぐらい。内に細かい子がある。一包は罌粟（けし）のようで、沢近くの農家ではこれを洗ってこすり、皮を取り去ってから蒸し曝（さら）し、舂（つ）いて米をとり、粥（かゆ）飯にして食べる。　根[甘、寒]　藕（はす）に似ている。饑饉の年にはこれを食べる。藕の香がし、味は栗のようである。煮食するが、虚を補い、気力を益し、腸胃を丈夫にする。…ほぼ腐骨に似ているので、俗にこれを川骨（かわほね）という。…和方に多く用いる。金瘡（きりきず）・折傷（うちみ）、また産前

図16
『百人女郎品定』散茶女郎

図17
『正徳ひな形』水にかうほねのもやう

産後の薬中に入れて、破血・止血の要薬とする。

河骨は食品であり、なおかつ、漢方というより和方医学の民間薬として役立ってきたことがわかる。早くも平安時代には『梁塵秘抄[6]』に「聖の好むもの」として牛蒡や独活・蕨などとともに挙げられ、修験者など聖（ひじり）の好む精の強い食物として知られていた。また、中世いけばなの花道書『仙傳抄[7]』には「禁花の事。…かうほねは、人をてうぶくする時のはな也。祝言におほきにいむなり。」と見え、驚くべきことに河骨は人を調伏する時の花とされていた。

俳諧では正保元（1645）年の『毛吹草[8]』巻第二俳諧四季之詞の六月に「白蓮花　澤瀉　河骨」と見え、延宝９（1681）年刊、桃青（松尾芭蕉）編の『俳諧次韻[9]』には「真桑流しやる奥の泉水（芭蕉）河骨の葉にほれ哥を書やつす（才丸）ほむらにたえて蛇児と化（ナリ）（其角）」とある。また、芭蕉の友の山口素堂[10]は元禄3（1690）年『いつを昔[11]』に「河骨や終にひらかぬ花盛」と詠んでいる。

食用や民間薬として重宝がられたこととは裏腹に、河骨には、根からは腐った骨を、葉には惚れ歌を書き、花は調伏するときの花で結局開かない、など、不気味で暗く切なく、陰のある実らぬ恋心のようなマイナスイメージが付与されてきたようである。

5. 河骨と河菜草

ではなぜ、食用にも薬用にも役立つ身近な河骨に、人々は暗いイメージを抱いたのだろうか。

そこで、俳句の歳時記を調べていたら気になる記述に出会った。それは、飛鳥井雅俊（1462-1523）の古今和歌集の注釈書『古今栄雅抄[12]』巻十にある、清原深養父の河菜草（かわなぐさ）の物名歌「うは玉の夢に何かはなぐさまん現にたにもあかぬ心に」の解釈である。

> かハなくさハ。是に古今三種乃秘事といへり。河におひたる苔也。河菜草と書。青女（カハナクサ）とも。定家卿は河骨（かうほね）と云物なりと也。或説小川の底に生たる也。

河菜草は、今川了俊の室町前期の歌学書『言塵集[13]』第五に「河菜草　藻也。古今秘事随一也。女情と書り」とある。また室町末期の連歌の第一人者、里村紹巴の連歌の辞書『匠材集[14]』には「かはな草　岩苔也。水底ににらのごとく成物なり。又河ほね正説なり」、「かはな草　河骨也」とある。これらの書にある古今秘事あるいは古今三種の秘事とは「三木」「三鳥」のことである。それは『古今和歌集』解説[15]に「秘事は講義からはずし、一事一紙にしたためて特定のものに伝授したのである。…三鳥は…百千鳥・呼子鳥・稲負鳥が普通である…三木は御賀玉木・めどに削り花・河菜草が普通である」との、短冊を用いた伝授法で、師匠から特別な弟子にのみ伝えられた秘伝である。河菜草はその三木の一つだった。そしてその

正体を、定家は河骨と伝授されたのである。河菜草はまた、別名を女情や青女とも書き、川底深い河骨の根が、深く秘めた女の情念と重なるものだったようだ。元禄4（1701）年刊の『けいせい色三味線[16]』には次のように河菜草を評している。

> 爰に三鳥三木とて二人の分知、色道の伝授事迄しりぬいて、およそ三ケの色里にかくれなし。「抑三木の内、川な草と申は、流れの女のさそふ水あらばと、客次第に成を、根のない草にたとへし事也。…」と、いまだ前方なる、素大臣衆へ大事を語りぬ。

色道の伝授を古今伝授の秘事に擬えて、三木、三鳥という人物に語らせる場面である。小野小町の「わびぬれば身をうき草の根をたへてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」（古今和歌集）を引用して色里の女を河菜草に例えている。河骨は浮き草ではないが、先に挙げた西川祐信の『百人女郎品定』の河骨文様着用例の多くが色里、俗に浮き草稼業といわれる女性たちであったのは、河骨すなわち河菜草とする見方があったからだろうか。

以上のように、池や沢辺に見られる河骨は食用・薬用に有用な植物であったが、古今伝授の三木の一つ、河菜草の正体とされ、女心を表すものとも見做されてきた。それはなぜか。河骨の根が婦人薬だからである。河骨（川骨センコツ）は現代でも実母散[17]などに産前産後の於血を除く薬として、また、月経不順など血の道の薬として配合されている。河骨（川骨センコツ）は女性ホルモンの不調による神経興奮状態の鎮静作用など、精神、身体どちらの不調にも効果がある妙薬として知られてきた[18]。女性特有の病気に良く効く薬だからこそ、河骨は女の命を守るものであり、女の情とも見做されたのであろう。

ところで、『和漢三才図会』にも河骨の花は単体で黄色とあるのに、なぜ雛形本の河骨文様は紫が多く、花穂の状態で描かれるのだろうか。葵紋となった、山中の谷間に咲く二葉葵の花は赤紫色で単体で咲き、花穂にはならない。花穂で咲く紫の花で、河骨と同じ水草の仲間には水葵がある。水葵は『和漢三才図会』の河骨の少し後に「水葵　那岐　水葵は池沢に生える。茎の先に一葉があって、萍蓬草の様に似ているが小さい。…花は桔梗の花に似ていて深紫色で数朶、大へんに美しい。」とある。『新撰御ひいなかた』に水葵は1例あったが、河骨が文様に描かれる時、葉は河骨似で、花は桔梗に似て美しく房状に咲く水葵と混同したのだろうか。いずれにせよ、河骨文様の花は花穂で描かれ（地色も桔梗と指定する例が多くあった）、文様名としては河骨が使われたのは見てきたとおりである。

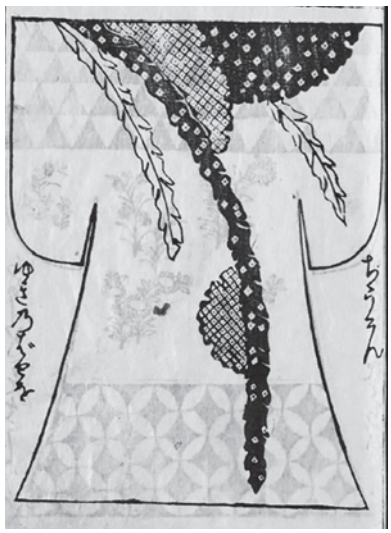

図18
『新撰御ひいなかた』ゆきのばせを

6. 芭蕉葉文様

次に帯の芭蕉葉文様を見てみよう。芭蕉葉文様は近世の小袖に盛行した文様である[19]。先述の『新撰御ひいなかた』に「ゆきのばせを（雪の芭蕉）」（図18）、元禄2（1689）年『色紙御

図19
『色紙御雛形』道綱母

雛形』の道綱母の歌の文様（図19）、絵画では伝右近源左衛門図の白地の小袖や、単独でホノルル美術館蔵の芭蕉図屏風に使われるなど、広く好まれたモチーフである。観山の「美人と舎利」では帯の文様に使われているが、小袖でも帯でも、芭蕉葉の意味するところは変わらない。むしろ、帯に施されるほうが、より一層その人物の正体、本性を暗示するとはいえないだろうか。京鹿子娘道成寺の白拍子花子の帯が、能の道成寺の鬼の装束を踏襲して、何枚小袖が変わろうとも黒地に丸紋尽くしで一定であったように[20]。

芭蕉すなわちバナナには実芭蕉つまり果実を食べる種と、葉を観賞する葉芭蕉とがあり、日本には耐寒性のある葉芭蕉がおそらく仏教伝来とともに渡来し、詩歌に故事に愛用されてきた。謡曲『葵上[21]』に「人間の不定芭蕉泡沫世の習、昨日の花は今日の夢と、驚かぬこそ愚なれ」とあるのは、芭蕉が、仏教の十喩[22]、すなわち諸行無常を示す十の喩えの一つとされていたからである。芭蕉は、葉の破れやすさはもとより、いかに丈が高くても木ではなく草であり、核のないことから、植物で唯一、十喩に加えられている。そして、人間の身を芭蕉に例えて無常を説くことは、『往生要集』や『正法眼蔵』などの仏教書から『保元物語』『童子教』など説話や教育書に至るまで幅広く見られ、伝えられてきたのである。

多くの逸話のある芭蕉であるが、それらを集大成したのが謡曲『芭蕉[23]』である。この曲は、中国は楚の国瀟水に居る、法華経を読誦する僧のもとへ女人が現れ聴聞を願う。女は「雪の中の芭蕉の偽れる姿」と芭蕉の精であることをほのめかし鐘の音とともに消える。里の男から「雪中の芭蕉」「芭蕉葉の夢（蕉鹿の故事）」等の話を聞きなおも読誦していると月さえる庭に芭蕉の精が現れ、無常の世を詠嘆し舞を舞い激しい風の中女の姿は消え、破れた芭蕉葉ばかりが残ったという話である。

芭蕉に幽霊をみることでは、文政９（1826）年の佐藤成裕の『中陵漫録[24]』蕉妖の項に信濃の怪異譚として次のような話が載る。

> 昔し信州の某寺に一僧あり。夜、書を読て深更に至る。一美人来て此僧に戯る。此僧、大に怒て此婦人を刀にて打去る。其帰路皆血点あり。翌朝、其血を尋至て見れば、庭間の芭蕉、尽く絶て地上に倒てあり。人々見て皆云く、此芭蕉の魂化生して婦人となりたるべしと云。予始め此説を信ぜず。後、琉球人に会して、琉球の蕉園の事を尋るに、…此園を蕉園と云。此蕉、甚だ高大に至る大樹の如し。雨中と雖も、雨の漏る事なし。夜深更に此中を独行するときは、必ず蕉妖に逢ふ。其の形は皆婦人なり。敢て人を害する事なし。只人の其婦人を見て驚くのみ。他の害ある事を聞ずと云。…此芭蕉と云者は、元来草なり。草にして長ずれば大樹の如し。此勢を以て見れば草中の王なり。其魂、化して妖を為すべし。…

信濃の寺で夜更けに美人が訪れ、戯れるので、僧が刀で打つと、その血は庭の芭蕉に続き、芭蕉は尽く倒れていたという話で、採薬家佐藤成裕は後に琉球人から同様の話を聞き信ずるに至ったとある。謡曲『芭蕉』同様、芭蕉が女人の幽霊になって表れる話だが、丈高く生い茂り、ただならぬ生気や妖気に溢れる芭蕉の魂は女人に化けて出るとみられていたのである。

さらに芭蕉は美しい女性のシンボルにもなっていた。人形浄瑠璃の代名詞にもなった浄瑠璃姫と御曹司義経の悲恋物語『浄瑠璃御前物語[25]』局入の場面で、義経は管弦の後、浄瑠璃姫を忘れられず女官十五夜の手引きで浄瑠璃の局へ行く。その際各人の障子を具体的に次々紹介しつつ浄瑠璃のもとへと渡っていく。

> まづ左手に当りつゝ　一叢薄を描いた障子の見えたるは　有明殿の局なり　その並びに　竹に鶯描いた障子の見えたるは　冷泉殿の局なり　その並びに　月に兎を描いた障子の見えたるは　月さえ殿の局なり…それよりもさし過ぎて　まづ左手に当りつゝ　錦の戸帳を掛けさせて　芭蕉を描いた障子こそ　我君様の一間処へ通ひの道にて候ふ

ここで、並みいる美しい女房達の其々の名前に因んだ障子を左右に十二枚過ぎて、一番奥の浄瑠璃姫の局の障子の絵は芭蕉だったのである。岩佐又兵衛工房の、目も彩な絵巻では、障子ではなく赤地の錦の戸帳に緑色の芭蕉が艶やかに描かれている[26]（図20）。芭蕉は浄瑠璃姫に相応しい、格別に美しく気高いものと見做されていたのである。芭蕉が浄瑠璃姫の象徴であったことは、同書の次の精進問答の段で、姫の背後の襖絵が芭蕉であることからも窺える。

図21
『美人繪尽くし』塩谷判官の妻

芭蕉が美人のシンボルであり、恋の文様でもあったことは、図19『色紙御雛形』の道綱母の歌に描かれることからも窺える。「嘆きつつ独りぬる夜の明くる間はいかに久しきものとかは知る」には芭蕉は一言も歌われていないが、芭蕉葉と柴垣、柳で歌意を表し、自分の門前を過ぎて別の女のところに通う夫への、美人の孤閨の恨みを表している。菱川師宣の『美人繪づくし』には芭蕉葉文様の湯帷子（浴衣）を着た塩谷判官の妻が高師直に覗かれる場面（図21）を描く。忠臣蔵の発端となる、絶世の美女、顔世御前の湯上り姿に芭蕉葉文様が使われている。同書の浄瑠璃御前の頁では、浄瑠璃は河骨文様の打掛を着て（図22）悲劇の美人を表している。

図22
同上 浄瑠璃御前

7. 美人の正体

以上、河骨文様と芭蕉葉文様の使われ方や意味を見てきた。この「美人と舎利」の美人がなぜ六条御息所なのか、もうお分かりと思う。胸の五七の桐文は皇族に繋がる高貴な身分、

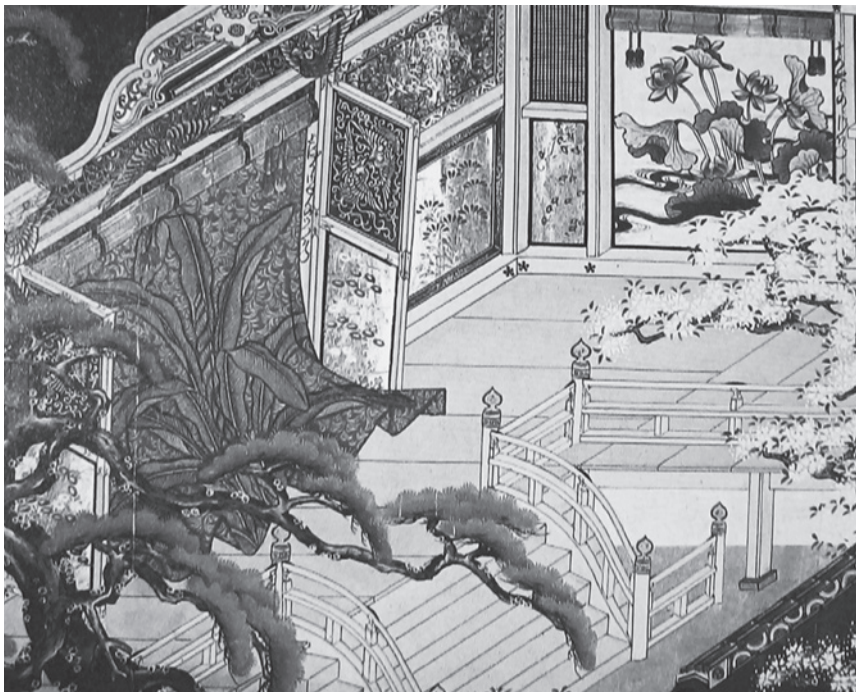

図20
『浄瑠璃御前物語絵巻』浄瑠璃御前の局の芭蕉

前皇太子妃を表している。打掛の河骨文様は、もしこれを葵文様と受け止めるなら、車座に円を描く描き方からは御所車を、そして、格子を御簾に見立てると、葵祭の牛車を暗示するとも言える。『源氏物語』葵の巻で、生霊となって源氏の正室葵上に祟る六条御息所は、疎遠となった源氏の晴れ姿を見に、秘かに祭りの場に車で出かけるのだが、今をときめく葵上の召使たちと車争いがおこり、惨めな思いをし、それがきっかけで生霊事件が起きる。『源氏物語』に取材した謡曲『葵上』では、六条御息所は車で現れ、病床の葵上を杖で打ち、車で連れ去ろうとするのである。六条御息所の打擲で葵上の容体は急変し、横川の聖が呼ばれ、鬼女の姿で再登場する六条御息所は調伏される。先に見たように、河骨には、女の情念、調伏、などの意味が付与されていた。打掛の丸紋を葵の文様とみて葵祭から車争いを連想し、美人を六条御息所と見ることも考えられるが、調伏や女情などの別名のある河骨文様と捉えるほうが、生霊になるほどの凄まじい怨念の持ち主の六条御息所に、より直截に結び付くのである。一方、帯につけた芭蕉葉文様は女の幽霊や美女の悲恋を表していた。高貴で格式高く美しい六条御息所は車争いで辱めを受けたことで自らを制御できず生霊となって、産前の葵上を苦しめ、夕霧を生んだ産後の葵上を死に至らせる。また、「美人と舎利」の打掛に芥子色が使われたのは、芥子が調伏の護摩に使われた[27]からである。『源氏物語』葵の巻によれば、心ならずも生霊となり、調伏された六条御息所は、着替えたり洗髪したりしても芥子のにおいが取れなかったとある。そればかりではない。彼女の強い情念は、自身が死んだ後も源氏につきまとい、若菜の上の巻で、紫の上の病状急変時に祟ったり、女三宮の出家をそそのかしたり、死霊となってもなお祟り続けたのである[28]。

図23
上村松園「焔」

つまりこの絵の右幅の美人は六条御息所の生霊を表し、左幅の舎利は死、すなわち死に至らしめた葵上の死に加えて、六条御息所自身の死霊をも表すと読み取れるのではないだろうか。

能楽の家に生まれた観山にとって謡曲『葵上』は身に沁みついた題材だったはずである。彼はそれを（そこが洋行帰りの新しい表現だったかもしれないが）左幅にまるで理科室の標本のように、骸骨を上からつるすように描いた。向き合う右幅の美人は、この絵を見る人が、打掛の文様を葵ととっても、河骨ととっても、テーマの六条御息所に辿り着くように、帯を芭蕉葉にしたのであろう。観山は何でも自分でやる人で、画室に鍵をかけて籠り、夜遅くまで古画や古代衣装の研究に余念がなかったといわれている[29]。美人の打掛の文様の、桔梗のような5弁の花は西川祐信の描く河骨の花に似ている。同じ狩野派を学んだ身であり、観山が祐信の絵本類を参照した可能性も高い。緻密で真面目な観山はかつて（明治23年）作品「雨の芭蕉」で精密な芭蕉葉も描いている。

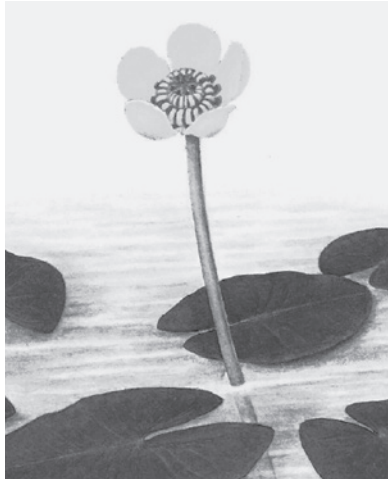

図25
『日本の絶滅危惧植物図譜』オグラコウホネ

8. おわりに―観山の影響か

六条御息所を描く絵にはほかに上村松園の「焔」（大正7[1918]年）（図23）がある。観山の

図24
「焔」部分

「美人と舎利」の９年後の作品である。この絵は打掛が白地に蜘蛛の巣と藤の花であるが、中の小袖文様については言及されていない。作者自身も桃山風の扮装と言っている[30]のみで、文様には触れていない。中の小袖は鮮やかな緑の紗綾型の綸子地に、桃山期に流行する辻が花風の花が白、青、緑色で描かれている（図24）。紗綾型は、能では稲妻、つまり、嫉妬の怒りを表し、能の『鉄輪』に着られる文様である[31]。ではこの花は何だろうか。今回、植物図鑑等[32]を見て、これは河骨の花（図25）ではないかと思い至った。河骨の花は黄色で単独で咲き、花弁と思われるところは実は萼で、中に多数の小さい長方形の花弁、その内側に、雄しべがぐるりと中心の雌しべを囲む。花弁状、外面はしばしば緑色をおびるそうだ。松園描く、小袖の紗綾型の鮮やかな緑は河骨の艶やかな葉の色を表すようであり、それに紗綾型の金色が、露の置かれた一粒鹿子の花弁（実は萼片）を黄色に映し出し、中央の雌しべを囲む雄しべの形状も河骨の花のように描かれている。松園は「焔」を描く際、先行する六条御息所の絵を参考にしたと思われるが、観山の「美人と舎利」も参考にしたのではないだろうか。髪型に近世中期と近世初期（桃山風）との違いはあるものの、どちらも打掛に捌き髪、青眉に鉄漿、と共通点もある。河骨の丸紋と芭蕉葉で謡曲を知る人ならば正体が分かる女人を骸骨と対峙させた、能の幽玄の世界に通じる、観山の静止した端正な美人。それに対し、松園は同じく近世風の扮装だが、後ろを振り返る一瞬の動作を凄艶な美人に描いた。蜘蛛の巣と藤の花の打掛に、中の小袖は鮮やかな緑の紗綾型に実物に寄せて描いた河骨の花が、美人の内面からあふれ出る女の情念を醸し出しているようだ。やはり河骨は調伏や女の情念の花なのである。

かつては当たり前のように身近な小川に咲いていた河骨（童謡の「春の小川」は河骨川だった[33]）も、河川の埋立てや改修等により絶滅危惧種となって久しい。しかし画家たちは明治、大正と移り変わる世情をよそに、変わらぬ遥か1000年前の女心を、河骨や芭蕉葉や蜘蛛の巣など身の回りの事象に託して描き継いできたのである。些末な、文様という限られた枠内の装飾でも、描く対象は自然界や当時・往時の世界観に繋がっている。そこには植物や昆虫、山河や景観など豊かな自然の恵みに感謝、共感し、それらを歌や物語に紡いで、おのれの心情を託してきた日本文化のあり方、美意識が息づいているのである。

[1] 葵祭について、行事、装束、儀式、採取する葵のことなど『葵祭（賀茂祭）』京都書院1991年、に詳しい。
[2] 森本勇矢著、日本実業出版社、2013年、76頁。
[3] 本稿掲載の雛形図は以下の通り。『新撰御ひいなかた』の図７から図10、『新版小袖ひいなかた』、『色紙御雛形』は小袖模様雛形本集成（学習研究社、昭和49年）。『新撰御ひいなかた』の図6、図11、図18、『源氏ひながた』『百人女郎品定』は国立国会図書館デジタルコレクション。『正徳ひな形』は今尾家所蔵江戸模様雛形本（はくおう社、昭和47年）、『美人繪づくし』は『天理図書館善本叢書師宣政信絵本集』（八木書店、昭和57年）。
[4] 稲垣栄洋『徳川家の家紋はなぜ三つ葉葵なのか』東洋経済新報社、2015年、227頁。
[5] 寺島良安編、正徳2（1712）年、（東洋文庫、平凡社、1992年）286～287頁。
[6] 日本古典文学大系73（岩波書店、昭和40年）419頁。
[7] 新校群書類従第15巻（名著普及会、昭和57年）756頁。
[8] 松江重頼編、俳諧論書（岩波文庫、1988年）61頁。
[9] 近世文学資料類従古俳諧編33（勉誠社、昭和52年）366頁。

[10] 「目には青葉山ほととぎす初鰹」(『江戸新道』延宝6[1678])年)の作者。
[11] 其角編、早稲田大学蔵、該当の句は「十題百句楊子に題ス」の4句目、4丁ウ。
[12] 早稲田大学図書館蔵、全16冊中8冊目、8丁ウ。
[13] 覆刻日本古典全集(現代思潮社、昭和53年)204頁。
[14] 覆刻日本古典全集(現代思潮社、昭和53年)46頁、50頁。
[15] 日本古典文学大系8(岩波書店、昭和43年)78〜83頁。
[16] 新日本古典文学大系78(岩波書店、1989年)99頁。
[17] 正徳3(1713)年発売開始の喜谷実母散には1包11.25g中センコツ1.12gを含む。
[18] 薬草と花紀行のホームページ (shop-pro.jp)、コウホネ(河骨、川骨)の項参照。
[19] 拙稿「芭蕉葉文様考―近世前期小袖文様を手がかりに―」(『服飾美学』第54号、平成24年)参照。
[20] 拙稿「苧環文様の意味―鏑木清方「春宵怨」をめぐる一考察」(『服飾美学』第66号、令和2年)では京鹿子娘道成寺を描く清方の絵について考察した。
[21] 新日本古典文学大系57『謡曲百番』(岩波書店、2007年)150頁。
[22] 『望月仏教大辞典』『仏教大辞彙』によれば①大乗において一切万法皆空の理を十種の譬喩にて示せるもの。即ち幻、焔、水中月、虚空、響、乾城、夢、影、鏡中像、化の十喩。②人身の堅実ならざることを十種に喩えたるもの。維摩経の十喩とも十種喩身ともいふ。聚沫喩、泡喩、炎喩、芭蕉喩、幻喩、夢喩、影喩、響喩、浮雲喩、電喩の十種。とある。
[23] 新日本古典文学大系57『謡曲百番』(岩波書店、2007年)205〜211頁。
[24] 日本随筆大成第三期三(吉川弘文館、昭和51年)311頁。
[25] 新日本古典文学大系90『古浄瑠璃説経集』(岩波書店、1999年)34〜36頁。
[26] 『岩佐又兵衛絵巻』MOA美術館編、1992年、53頁。
[27] 注14『匠材集』第3巻に「けしの香　護摩に芥子をたく也」とある。
[28] 『人物で読む『源氏物語』第七巻―六条御息所』(勉誠出版、2005年)に詳しい。
[29] 柏木智雄「下村観山の晩年―画業再検討のための覚書―」(横浜美術館『生誕140年記念下村観山展』2013年、169頁)による。
[30] 『上村松園全随筆集青眉抄・青眉抄その後』求龍堂、2010年、100〜101頁。
[31] 野村四郎・北村哲郎共著『能を彩る文様の世界』(檜書店、1997年)82頁。
[32] 大場秀章監修・解説『日本の絶滅危惧植物図譜』アボック社、2004年。図25は同書41頁のオグラコウホネ。
[33] 注4、228頁。

(ふじい　きょうこ　群馬県立女子大学非常勤講師、服飾美学会運営委員)